

研究資料

徳富蘆花が見たロシアの林

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2015年10月1日受付; 2016年2月1日受理

Russian wood seen by Roka Tokutomi

Naokata Okajima

Laboratory of Green Space and Environmental Information Minami Kyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 1, 2015; Accepted February 1, 2016

This study shows two places where Roka Tokutomi perceived “zokibayashi,” which means forests associated with special Japanese senses, near Tolstoy’s estate. Roka and Tolstoy are famous writers of Japanese and Russian, respectively. Roka’s diary has been analyzed in this survey. The diary is originally written in Japanese and was sent to Tolstoy and translated into Russian. In the course of the translation, the word “zokibayashi” was understood merely as “forest.” Similarly, “zokibayashi” has also been translated as “forest of inferior timber” in English. We indicated that there exist some differences between “zokibayashi” and “forest.” Furthermore, Roka found an area where young deciduous trees were growing. He called it “sorin” in Japanese, which means sparse forest. The “sorin” was greatly favored by Tolstoy. Since the young trees usually appear with slim twigs and low trunks, their scene might construct a kind of Japanese garden made of “zokibayashi.”

Key words: Roka Tokutomi, sorin, Lev Nikolayevich Tolstoy, zokibayashi.

1. はじめに

徳富蘆花（1868-1927, 以降蘆花）は1900年に『自然と人生』の中の短編『雑木林』¹⁾において、武蔵野にみられる雑木林の林相を明らかにした文学者である。造園学の創始者と言われる上原敬二が東京帝国大学農科大学林学科を卒業したのは1914年であり、日本造園学会が設立されたのが1925年であるから、学としての造園分野もしくはその関係者が雑木林という対象を視野に入れるようになったのは蘆花による叙述のあとのことになる。蘆花は国木田独歩（以降独歩）と知り合いであり、1898年に独歩が短編『今の武蔵野』（のちに『武蔵野』²⁾）で、武蔵野にある「檜からなる落葉林」の美を文字にして表現したことは知っていた。のみならず、独歩から「自然の日記を書いてみたら面白いだろう」とすすめられて文章を書きはじめ、それが活字化されたものが『自然と人生』である。蘆花は

独歩が「檜^{なぐい}の類の落葉林」, 「かかる落葉林」, 「林」などと表現していた武蔵野に存する林を、より具体的に書き記した。独歩にとっては「檜」が特に重要な樹木だったのであろう。独歩の認識の対象は絞られており、檜以外の樹木名は記していない。一方蘆花は「檜、樺、榛、栗、櫟など」（もっと多い場合もあると指摘）の中に、まれに「赤松、黒松」が抜きんでて高く混じっている林として「雑木林」を定義した。「余は斯雑木林を愛す。」と述べている。蘆花は独歩の仕事を十分意識しており、そのつながりから、自分の短編『雑木林』における指摘が、独歩の『武蔵野』での落葉林の美の発見に対し、新たな視点を投じたものであることを自覚していたはずである。

1906年の6月30日から7月4日まで蘆花はレフ・トルストイ（1828-1910）の住むヤスナヤ・ポリヤーナを訪れた。蘆花は、文学者としてのトルストイに会いに行ったのであるが、ヤスナヤ・ポリヤーナに行くことにより、トルストイの住環境そのものを体験し

た。帰国後は東京郊外に引っ越し、美的百姓と称して農業をしながら執筆活動をするようになった。隣地には雑木林があり、それは「千金ただならず」彼が愛した場所となった³⁾。トルストイは、1849年(21歳時)にヤスナヤ・ポリヤーナの敷地を受け継いで以来、屋敷内に積極的に植樹を行っていた。植樹によって林を造っていく際、トルストイはそれぞれが異なった独自の風景となるようにしながら植樹を進めていき、林それぞれに独自の名称を付けて呼んでいたという⁴⁾。こうしたことからトルストイは彼なりのスタイルで造園を行っていたと言えよう。

蘆花は1907年の『順礼紀行』⁵⁾の第11章でヤスナヤ・ポリヤーナでの滞在日記を公表した。『ヤスナヤ・ポリヤーナの五日』である。これを読むと蘆花が現地で出会った風景や、そこで体験したことがらがある程度分かる。それによれば蘆花は、トルストイ屋敷内外の林に対して、「林」(p.163 他複数箇所)、「樺の林」(p.168, 179, 190)、「雑木林」(p.170, 178)、「園林」(p.175)、「緑の林」(p.179)、「疎林」(p.198, 199, 205)などの表現を使って示している(以上の項数は文献5による)。「雑木林」は1900年に蘆花が好ましいと感じた林の名前であり、「疎林」はトルストイの屋敷内で蘆花が発見した好ましい林の名前である。蘆花が現地の体験をまとめた『順礼紀行』は1907年にトルストイに贈呈され、しばらくトルストイの書庫に保管され、その中の『ヤスナヤ・ポリヤーナの五日』は、のちにロシア語に翻訳されることとなった⁶⁾。

本論の目的は、蘆花がトルストイ宅を訪問し滞在し

た時、どこで彼が「雑木林」「疎林」と出会ったか、それはどのようなもので、文化の違いを経てそれがどのように解釈されたかを示し、検討することである。蘆花自ら1900年に武蔵野地域で定義した「雑木林」という言葉が海外の風景の描写で使われたことは、異なる風土において同一概念が適応されたということであり、筆者はこのことを重要視している。一方「疎林」という、これまで蘆花が示していなかった言葉が生まれたことも重要である。

造園に関する書籍の中で言葉の用法の問題についてくわしく追究している事例としては、中村、尼崎⁷⁾による「ニハ」、「ソノ」、「シマ」、「パーク」、「ガーデン」など、高橋⁸⁾による「Forest—もり—」、「Park—パーク—」、「Garden—にわ—」がある。筆者は以前の報告⁹⁾で、ヤスナヤ・ポリヤーナの屋敷内の敷地全体の概況を示したが、今回の点については詳述されていない。

2. ヤスナヤ・ポリヤーナでの蘆花の滞在記から

(1) 蘆花が見た「雑木林」

蘆花の『ヤスナヤ・ポリヤーナの五日』⁵⁾はたいへん克明に書かれている。彼の文章は一見饒舌に見えるかもしれないが、きわめて正確に事物を観察し体験を文章化している。

トルストイの屋敷での滞在中に蘆花が過ごした場所は、図1の配置図上の①の位置にある小さな小屋で、



図1. トルストイ屋敷内部配置図

出典：2011年の <http://www.yasnayapolyana.ru/museum/manor/index.htm>.

「パピリオン」と呼ばれていた。それは1888年に建てられたもので、画家のイリア・レーピンやニコライ・ギーなども泊まった場所である¹⁰⁾。その小屋を図1の地図の①から出ている矢印の方向に向かって写したものが写真1である。ここを滞在中の拠点として蘆花は、配置図上右側にある⑨のトルストイの家に行ったり、



写真1. 蘆花が滞在した小屋

2011年筆者撮影

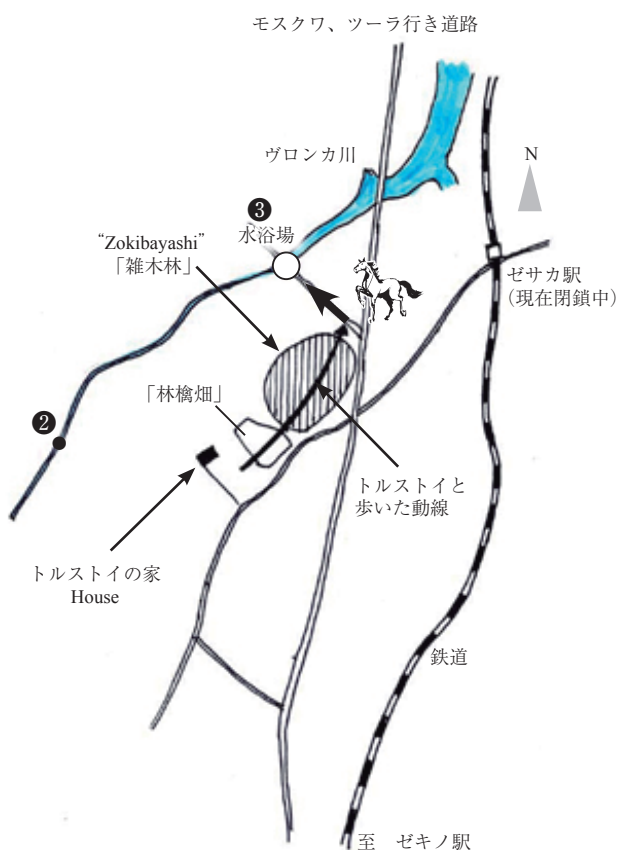


図2. 一箇所目の雑木林

水浴に出かけたりした。蘆花が屋敷内外の林を通り抜けて移動した体験は表1のようにまとめられる。同表は滞在日記の日付ごとにまとめたものである。歩いて移動した場合と乗り物で移動した場合がある。滞在中、蘆花はヴロンカ川への水浴に4回行っている。5日間の滞在期間としては多い回数である。ヴロンカ川の水浴箇所は2か所あり、そのうちの1か所は図1の②の位置にある。ここにはトルストイの家族のための水浴小屋があった。ここではヴロンカ川はトルストイの屋敷内部を流れている。蘆花が1回目に「雑木林」に行ったのは6月30日で、その時の行路は図2に示している。途中まではトルストイと二人で行ったが、「雑木林の緑深き中」をすり抜けて広い道に出ると夫人と娘の乗った馬車が待っていて、そこから水浴場(③：図1の範囲外)までと帰り道とは広い道を馬車で移動した。図2の中に馬のイラストで示した部分が馬車に乗り始めた場所である。2回目に「雑木林」を見たのは7月1日で、草刈に行ったときである。その行路を図3に示した。蘆花は、「西裏の林檎畑を抜けて雑木林に入る。…雑木林の端やや開けた所、すでに刈られたる草一面に伏し…」と書いている。この開けた場所で、家族の人と草刈(草掻き)を行った。このとき通り抜けた林檎畑は図2に示された林檎畑とは異なる。

これらの図は、今は当時から時間が経って、現時点では地図上で場所を特定することは難しいため推定図とした。

表1に示したように、蘆花はトルストイの屋敷内の林を行ったり来たりした。屋敷は400ヘクタール以上であり、一望できるような環境ではない。7月2日には、蘆花は一人で水浴に行った。1回目に行ったのと同じヴロンカ川の下流の水浴場である。二日前に行った時

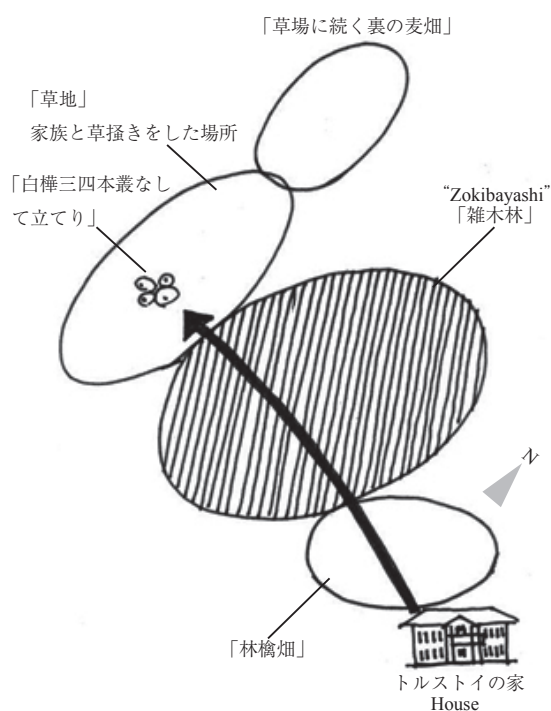


図3. 二箇所目の雑木林

の道を思い出しながら行ったことであろう。その途中で蘆花は白樺林を見た。そこで『『獵者のスケッチ』を思い浮かべつつ』坂を上った(文献5, p.190)という。『獵者のスケッチ』とはツルゲーネフによって書かれた本の名前で、その中の短編『あひびき』だけが二葉亭四迷によって日本語に訳され、その訳の白樺林の様子を読んだ独歩が身近な「落葉林」の美に気づいて短編『今の武蔵野』が生まれたところのものである。『獵者のスケッチ』を思い出しながら歩んだということは、短編『あひびき』を収めたものの書籍である『獵者のスケッチ』の存在を知っていることの表明である。そこでの落葉林の描写こそが、武蔵野の林の美を発見するきっかけになったものなのであるから、眼前にロシアの白樺林の実物を見ながら蘆花は、武蔵野の風景をどこかで想起していた可能性はある。この仮説はヤスナヤ・ポリヤナ到着する前に書かれた日記(以下の段落に示す)においては明らかに示すことができる。

蘆花は6月26日にロシアに入り、レニから列車に乗ってツーラのある北東方向に向かったわけであるが、ロシア入りを果たしたとき、「ゴーゴリー、ツルゲーネフ、トルストイ、ゴンチャロフ、近くはゴルキー、チエホフの小説にてわが知るロシアに入るは寧ろ故郷に入るの感あり」(文献5, p.151,152)と書き、文学で知っている知識によって、小説の舞台となった国の風景に親近感がわくという感覚を示している。またロシアの平野について6月29日には「武蔵野を斗舛で量りばら撒きてなほあまりある大露西亜の原」(文献5, p.154, 155)という歌をよんでいる。ロシアの平野を武蔵野ではかるしぐさを想像するというのは普通ならしない

ことであろう。もともと武蔵野の林の美を発見させた源泉がロシアの林の文学的描写だったわけであるから、今度は逆にロシアの風景を見ながら武蔵野の風景をオーバーラップさせたり検証したりしようとする思考の方向性が生まれていると考えることができる。

(2) 蘆花が見た「疎林」

7月3日は、ヴロンカ川への水浴の三回目の日であるが、このときの目的地となったのが図2の②の場所である。先に行ったトルストイと川で待ち合わせをすることにして、家族の人にカトキーという車に乗せてもらって行った。カトキーはヴロンカ川沿いの水浴小屋のすぐ前まで蘆花を乗せて行った。その途中に「疎林」の間を通ったという。カトキーは図1における太くて白い点線矢印で表した道を通ったのであろう。水浴小屋からの帰り道はトルストイと一緒に歩いて帰り、そのときのことを「翁のあとより路をはなれて疎林を歩む」と書いている。つまり、行きの、車が通行できた路とは異なり、林の中を歩いていく進路であったと思われる。「樺あり、檜あり、皆若木、蔭と光と疎らに落ちて、七月の緑、衣を染めんとす。」(文献5, p.199)としている。落葉林の緑の持つ印象の強さについて蘆花は小編『雑木林』においては、「青葉の頃林中に入りて見よ。…吾面も青く、若し假睡すれば夢亦緑ならむ」と表している。「疎林」はトルストイが「余はこの林の散歩を好む」と言った場所であった。二人は歩きながらドストエフスキー、ツルゲーネフ、チエホフなどのロシア文学者についての論評をしながら帰った。

表1. 林の中を歩く体験

日付	節番号	題名	一人で歩く	トルストイと歩く	家族の人と歩く	備考
1906/6/30 1日目	1	「トルストイ翁訪問」	—	—	—	
	2	「冒頭第一の失敗」	—	—	—	
	3	「初対面」	—	—	—	
	4	「家眷の人々」	—	—	—	
	5	「ヴロンカの水浴」	—	「雑木林」「林」(往路)	—	往路の途中から馬車を使う。帰路は馬車を使う。
1906/7/1 2日目	6	「一日の夕」	—	—	—	
	7	「二子の父翁観」	—	—	—	
	8	「草搔き」	—	—	「雑木林」「林」(往路)	
1906/7/2 3日目	9	「露台の夕」	—	—	—	
	10	「根本的革命」	—	—	—	
	11	「心中の暗鬼」	—	—	—	
	12	「ヴロンカの水(二たび)」	「樺林」(往路)	—	—	
	13	「ヤスナヤ、ポリヤナの村」	—	—	—	
1906/7/3 4日目	14	「一日の生活」	—	—	—	
	15	「記念の署名」	—	—	—	
	16	「ヴロンカの水(三たび)」	—	「疎林」(帰路)	—	往路はカトキーという車を使用。車は「疎林」の中のたいらな道を進んだ。
	17	「器用なる夫人」	—	—	—	
1906/7/4 5日目	18	「最後の日」	—	—	—	
	19	「ヴロンカの水(四たび)」	「疎林」(往路)	「林間」(帰路) 疎林のこと	—	
	20	「露台と書斎」	—	—	—	
	21	「告別」	—	—	—	

7月4日も前日と同じ水浴場で待ち合わせしたので、蘆花は今度は一人で（「余は午後独歩…赴く」と書いている。あたかも国木田独歩の名前をかけて言っているかのようである。）歩いてヴロンカ川まで行った。前日と同じ「疎林」の間を縫って歩いていった。この部分は、「愛すべきかな丘の上のこの疎林林間の道、日は木の葉の間を尋ねて金の点を落とし、人は若木の間を縫うて緑の蔭を行く」と記されている。先に着いていたトルストイとヴロンカ川で水浴し、帰りはまた「昨日のごとく林間を歩みつつ話す」としている。帰り道でトルストイは、ロシアも日本も、欧米の皮相的な文明の跡を追うのではなく、東洋民族特有の使命を全うしなければならず、それには神を愛し人を愛することはもちろんであるが、土を耕し額に汗をする農的生活が鍵となるという趣旨のことを蘆花に話した。

蘆花はヴロンカ川沿いにあった水浴小屋の白い柱に落書きをしている。そこに彼はトルストイのもとに立ち寄ったことの成果を記した。彼は以下の言葉を書いたという。

“Fare thee well, Varonka!
Forever shall I remember thee.
Thou hast been my Jordan,
O thou blessed Varonka!” (p.205)

蘆花はここでヴロンカ川が自分にとってのヨルダン川であるとしている。蘆花はヤスナヤ・ポリヤーナに来る前、聖地エルサレムを訪れており、ヨルダン川は二度見ている。一度目は5月25日で、その日は死海から馬車でヨルダン川まで行っている。川の水は濁っていた。途中で同行することになった二人の旅人のうちの一人はヨルダン川に飛び込んで泳ぎ、もう一人は小さい瓶にその水を汲んで土産とした。蘆花はその川の水で手をすすいだ（文献5, p.51,52）。旧約聖書においてはイスラエルの人々がヨルダン川を渡ることによって待望の約束の地（乳と蜜の流れるカナンの土地：出エジプト記3.17などに記述）に入ったことは有名である。蘆花によれば、ヨハネはヨルダン川でキリストを洗礼したという（文献5, p.52）。そうしたヨルダン川の歴史をふまえたうえで、自分がヤスナヤ・ポリヤーナに来たことで人生の新しい境地に達することができたという気持ちを刻印したものが上の言葉であろう。

文中「疎林」としていた場所は、以前あった林を伐採したところに樹木が成長しはじめていた場所であろう。伐採した木を外部に持ち出して売っていた¹¹⁾一方で、トルストイは屋敷内全域にわたり、積極的に植樹を行っていた。そこもトルストイが植樹をした場所かもしれない。この「疎林」に対してトルストイは「余はこの林の散歩を好む」としており、蘆花も「愛すべきかな丘の上なる疎林々間の道」と表現しており、二人ともこの林に好ましさを感じている。そこは蘆花によれば樺や樺をはじめとする若い木々があり、それら細い幹の落葉樹がまばらに生えていた場所である。そこは雑木の庭に近い感覚がある林相であったと言えるのではないかな。

ヤスナヤ・ポリヤーナのウェブサイトには同地の森のことについて記した文章がある。それを、2011年時のウェブサイトの地図上に当てはめて考えると、この疎林があった場所は、図1の白い円周で囲った部分の辺りか、②のすぐそばのどちらかであろうと考えられる。⑩の場所は、それ以前は木を切ったり、家畜を放牧したりすることを禁じていた保護区であるが、1860年代にこの部分の何か所かで木が伐採されたという。その辺りは「スタリイザカズ」と呼ばれる場所である。「スタリイザカズ」のそばには「アフオニナローシャ」と呼ばれる⑪の場所があり、ライムとオークが成長していたが1860年代にその古い木々が切られ、のちにポプラやカバが広がったという。そこはトルストイの死の数年前に再び伐採され、「ノヴィイザカズ」と呼ばれるようになった。⑫と記してあるところは、「イストチェック」と呼ばれ、現在樹齢180年くらいのライムとオークが成長しているところである。またトルストイ一家が水浴する場所のそばには、小さいオークの森があったという。名前は、「水浴場近くのオークの小森」であった。2011年前報を書いた時には、屋敷美術館のウェブサイトにて全体の地図がのっていたが現在のウェブサイトでは屋敷内の地図はなくなっており、文字と写真だけの説明となっている。

3. 蘆花の滞在記のロシア語訳

前述したように、ロシア滞在記を含んだ『順礼紀行』は、蘆花の日本帰国後に出版され、その後トルストイに送られた。いったんトルストイの蔵書になったその本の中の『ヤスナヤ・ポリヤーナの五日』は、1965年に日本語からロシア語に翻訳された。ここではその訳を確認する。翻訳が掲載されたのは、『文学遺産—トルストイと外国世界—』⁶⁾とされた冊子で、翻訳はV. コステレヴァという人が行った。ここでは本論2章で述べた、蘆花が林の中を歩いた場面が、ロシア語にどのように訳されたかを確かめる。それを表2に示した。蘆花が「雑木林」と記した箇所は、《лес》と表記されていて、一般的な「森」もしくは「林」という言葉に訳されている。蘆花にあって特別な言葉であったはずの「雑木林」であったが、そのようなニュアンスは捨象されてしまっている。訳者は「森」「林」という大きな概念に入れておけば、その具体的なありようをも包摂できると判断したのであろうか。筆者としては翻訳者にはもう一歩踏み込んで訳してもらいたかった。

4. 参照事例としての 蘆花の短編『雑木林』の英語訳

蘆花にあって貴重な場所であると筆者が考える「雑木林」は、英語に訳した場合にどうなるのだろうか。『自然と人生』の中の小編『雑木林』がアーサー・ロイドらによって1913年に訳されていたので¹²⁾それを引用する。

“Forests of Inferior Timber”

Between Tokyo and the river Tama in the western suburbs of the city, there are several hills, and valleys, and winding roads, now going down to the valleys and now going up the hills. Each valley is a rice field mostly with a brook running through it, and a few water mills are seen along the stream. Most of the hills are cleared and the fields are laid out. But here and there remain many forests of inferior timber shaped like a square. I love these forests of inferior timber. The trees are *quercus grandulifera*, *quercus serrate*, the black alder, the chestnut trees and many others with a few large trees, but most of them are young trees grown out of stumps, and the under-growth are clearly cut off. Seldom red pines and black pines tower high up above the forest and thereby hold up a green canopy under the blue sky. When the forest begins to visit it, the whole forest turns yellow and red, superior even to any maple-forest.

After all the leaves have fallen off the trees, it is good to see a million branches of the cold forest shoot up to the cold sky. But it is extremely good to see the forest when the sun is set, the earth is filled with the evening smoke, the sky over the forest is light purple and the big moon like a tray is making her way slowly out. When spring comes and the sprouts of all light colors- light brown, light green, light red, light purple and light yellow- are coming out, it is not necessary to admire the cherry blossoms alone.

When the young leaves are green, suppose you visit the forest. Each leaf being reflected in the sun light, all the leaves overhead seem as if green gems and blue gems were making a canopy. Here under the canopy green leaves, your face may be green and if you take a nap un-

der it, your dream may also be green.

When the autumn sets in and mushrooms begin to grow, two -colored lespedeza and Chinese miscanthus decorate the edges of forest, and *patrinia scabiosaefolia* and *authistiria arguens* are growing disorderly in the midst of the forests. Nature has constructed an autumn garden here. If you pass by these forests on a cool and dewy night, whether the moon is out or not, you will hear the songs of many an insect, such as *calyptotryphus marmoratus*, *homoeogryllus japonicus*, noisy crickets, and others. It is indeed charming that the forests have changed into an insect cage.

この訳の冒頭では、日本語で「雑木林」となっていた言葉を“forests of inferior timber”「劣等木材の森」としている。しかし、日本語原文でこの短編をみると、蘆花は役に立たないとか、劣悪な樹木からなる林という意味を特に文中に入れていないことが分かる。日本語の「雑木林」の「雑」の字には、「まじる」という意味が入っており¹³⁾、蘆花の短編『雑木林』本文中にも、榎、樺、榛、栗、樺、赤松、黒松など複数の樹木が挙げられ、それらが混じっていて、下ばえがきれいに払ってある場所であることが示されている。もしくは、多くが切株から族生した若木であるとしている。ここで見られた外国語の訳の状況は、概念が言語の壁をこえて伝わっていくとする際によく見られることがらを示しているに過ぎないかもしれないが、雑木の庭の発祥を探る試みの中で、興味深い問題提起を示していると考ええる。筆者としては、ここでの蘆花の原文の本文そのものが、「雑木林」という表題の定義を示しているのであるから、そのまま“zokibayashi”としておいても意味が通じるであろうと考える。英訳するとしたら“Forests of diversified trees”であろうか。

表2. 徳富の滞在記のロシア語訳

節番号	日本語	ロシア語
5	「丘を上りて、この方近道也とて 雑木林 の緑深き中に入りぬ。」	«Мы поднялись холм и, идя по дороге, вошли в глубь густого зеленого леса .»
8	「西裏の林檎畑をぬけ、 雑木林 に入る。」 「 雑木林 の端やや開けたる所、すでに刈られたる草一面に伏し、草地の中程に白樺三四本一叢なして立ち。」	«Мы пересекли яблоневый сад и вошли в лес .» «Поляна у опушки леса была сплошь покрыта скошенной травой, на середине росло несколько белых берез.»
12	「道に向かひて側立つ樺林に「獵者のスケッチ」を思い浮かべつつ坂を上りて」	«Затем я вышел на дорогу возле березовой рощи и поднялся на холм. Пейзаж напомнил мне «Записки охотника»»
16	「麦畑に隣る 疎林 の間に入る。林中にはおのずから坦なる路あり。」 「翁のあとより路をはなれて 疎林 を歩む。樺あり、榎あり、皆若木、陰と光と疎らに落ちて、七月の緑、衣を染めんとす。翁の曰く、余は此林の散歩を好むと。」	«И въехали в лес рядом со ржаным полем.» «вслед за Толстым пошел в рощу , свернув с дороги. В роще молодые дубки и березы. Блики солнца и тени падали времечку, яркая июльская листва бросала зеленый отсвет на одежды. - Я люблю гулять в этом лесу»
19	「愛す可きかな丘の上なる此 疎林 々間の道、日は木の葉の間を尋ねて金の点を落とし、人は若木の間を縫ふて緑の蔭を行く。此林と此林に逍遙して神と語り人を思ふ翁の面影を見るは今日を限りにて、明日よりは海山はるかに隔てて追懐の影となるよと思へば、移す一步も惜しき心地す。」 「昨日の如く 林間 を歩みつつ話す。」	«Она бежит среди рощи между живописных холмов. Солнечные лучи, пробиваясь сквозь сеть листвы, падают золотыми пятнами на землю. Идем среди молодой поросли в зеленой тени. Сегодня в последний раз я увижу Толстого, который, гуляя в этом лесу, говорит с богом и размышляет о человеке. Завтра мне придется с ним расстаться, нас разделят моря и горы, и он останется только в воспоминании» «Вчера мы с ним гуляли в этом лесу .»

5. まとめ

まず、蘆花が「雑木林」という言葉を生み出した背景について述べた。「雑木林」は蘆花が武蔵野の領域で発見した、好ましい林のありようを示したものである。それをふまえて本論では蘆花がトルストイを訪ねたときの記録『ヤスナヤポリヤーナの五日』を用いて、彼が「雑木林」があったとした現地の二か所の場所を推定図で示した。蘆花はトルストイの住居そばに雑木林の存在を認めた。また、蘆花が現地で発見した「疎林」についてもその特徴をあげ、図中に推定場所を示した。蘆花のこの滞在記録はのちにロシア語にも訳されたが、「雑木林」や「疎林」は一般的な意味の「森」もしくは「林」という言葉に訳された。翻訳したロシア人にとって「雑木林」は「森」もしくは「林」という大きなカテゴリーの中に入れておけばよいものであったのだろう。また、1913年に行われた英訳では、「雑木林」は、“forests of inferior timber”，「劣等木材の林」となっており、日本語のニュアンスにある「混じる」という意味は消えた訳となっていた。トルストイの屋敷で「疎林」として蘆花が示した若い落葉樹からなる林は、トルストイが好んで散歩していた場所であると同時に、蘆花も好ましく感じた林であった。そこで蘆花は、細い幹で、あまり大木になっていない落葉樹林を好ましく味わったということになると考える。スケールは異なるかもしれないが、雑木の庭のロシア版ともよぶべき姿がそこにあったのではないかと想像される。

蘆花は日本国内の武蔵野と呼ばれる領域で発掘した言語である「雑木林」という言葉をロシアの風景に対して適応したわけであるが、ロシア側ではそこまでのことを知る必要性はなかった。「雑木林」という言葉で示すことができなかつた好ましい林の様子に対しては、蘆花は「疎林」という新しい言葉によって表現したものと思われる。「疎林」には蘆花が雑木林の美点を表現するのに使った特徴描写と類似する観点が見られた。

今後の課題

地図上で蘆花の指摘した場所を完全に特定することはできなかったが、今後、トルストイ時代の屋敷林の管理の歴史が明快に解明されれば、それが可能となる素地が整う。筆者は雑木の庭の東京での創始者である飯田十基の薫陶を受けた星進氏から、生前、雑木の庭は世界の庭である（まだ知られていないが日本を代表する、世界への普遍性をもつ庭であるという意味であったと思われる）、という言葉聞き、この言葉に触発されつつ、国境を越えてその日本の雑木の庭の源泉を探ろうとしてきたのであるが、こうした意欲はロシア側には理解されにくい。そもそも落葉樹林が自然林としても等身大のスケールとしてふんだんにあるロシアにおいては、日本でのように縮小したスケールで庭に落葉樹を取り込む必要性はいまのところないということ

があるだろう。しかし、たとえロシアの国土が日本と比較にならないほど広大であるとしても、広い林を管理するには費用がかかる。トルストイの屋敷とは特別な場所であり、そこは世界的な文化遺産と考えられるので今後も管理に必要な人手は確保できるかもしれないが、一般の人々にとってこうしたスケールの緑地を維持管理することができるということは考えにくい。

今回、蘆花が訪問した時代の林の状況を考察する上で進めにくかったこととして、現地の掲示板に描かれた地図、現地で配布された地図、ウェブサイトに掲載されたり削除されたりする地図、航空写真などの図像、またそこに記載された説明語句などが一致をみないということがあった。ここには情報制限がなされているという側面があるかもしれない。まだ不確定なことがあるということかもしれない。言語の違いに、情報サービスの問題も加わり、非常に難しい問題を含んでいることを感じながらまとめた。さらなる研究のためには、ロシア語に精通していくことが求められる。今後の関心として、独歩も蘆花もともに、徳富蘇峰の設立した民友社に所属して執筆活動を行っていたわけであるので、蘇峰からの影響について考察していくことも考えられよう。

要 約

徳富蘆花が1906年にトルストイの屋敷（ヤスナヤ・ポリヤーナ）を訪問した時、蘆花は二カ所で「雑木林」と遭遇した。「雑木林」とは、1900年に国木田独歩の影響を受けながら蘆花自身が武蔵野で発見した、独特の美しさを持つ落葉樹林である。蘆花とトルストイは、それぞれ日本とロシアにおける著名な文筆家である。本論では蘆花のトルストイ滞日記を分析した。その日記は日本語で書かれたあと、トルストイに贈呈されロシア語に翻訳された。その訳では、「雑木林」は「森」もしくは「林」として解釈され露訳された。また、「雑木林」は「劣等木材からなる林」として英訳された事例があった。本論では、「雑木林」と、「森」もしくは「林」との違いを示した。さらに蘆花は、ヤスナヤ・ポリヤーナにおいて若い落葉樹が成長しつつある林を発見し、その場所を「疎林」と呼んでいる。「疎林」は、トルストイが非常に気に入っていた林であった。「疎林」の構成樹木は若い落葉樹であることから、幹が細く、樹高が低い状態だったと想像されるため、そこは「雑木の庭」の視覚的様相を持った風景であったと考えられる。

謝 辞

本文中、蘆花の北東の水浴場所の特定においては元熊本大学教授の中村青史氏、言語確認においては東洋文化研究所のアナスタシア・ペトロヴァ氏、ロシア語資料の提供と蘆花の両方の水浴場所の確認においてはヤスナヤ・ポリヤーナ屋敷美術館のエレナ・アレキナ氏にご協力いただいた。ここに記して謝意を表する。

参考文献及び注釈

- 1) 徳富蘆花 (1994) 自然と人生：岩波文庫 76 刷, 64-65.
- 2) 国木田独歩 (1996) 武蔵野：岩波文庫, 71 刷.
- 3) 岡島直方 (2013)：『みみずのたはこと』にみる徳富蘆花粕谷住居の緑地環境, 南九州大学研究報告 43B：23-32.
- 4) <http://ypmuseum.ru/en/component/content/article/81-2011-08-21-19-36-30.html>.
- 5) 徳富健次郎 (蘆花) (1989) 順礼紀行 (復刻版)：中公文庫, 157-213.
- 6) ЛИТЕРАТУРНОЕ НАСЛЕДСТВО ТОЛСТОЙ И ЗАРУБЕЖНЫЙ МИР (1965), МОСКВО, 170-204.
- 7) 中村一・尼崎博正 (2001) 風景をつくる：昭和堂, 7-19.
- 8) 高橋理喜男・井手久登・渡辺達三・亀山章・勝野武彦・興水肇 (1986) 造園学：朝倉書店, 6-14.
- 9) 岡島直方・アナスタシア ペトローヴァ (2011) 雑木の庭が出現するまでの文化的背景とロシア文豪の屋敷内樹林地の現状 南九州大学研究報告 41B：7-16.
- 10) 2011 年のヤスナヤ・ポリヤーナ屋敷美術館のウェブサイトに記載されていた内容. 現在は下記のアドレスで見ることができる.
<http://old-yp.amr-museum.ru/museum/manor/map/24.Htm>.
- 11) ヤスナヤ・ポリヤーナ屋敷美術館学芸員エレナ・アレキーナ氏による回答, 筆者へのメール, 2015 年 10 月.
- 12) Arthur Lloyd, M. Von Fallot, H Ono (1913), NATURE AND MAN, Tokyo Kogakukan, 76-77.
- 13) 上田万作・栄田猛猪・岡田正之・飯田伝一・飯島忠夫 (1916) 大字典：講談社, 2188.